



episode 30 じいじの手で生き返る絵本

投稿者 市村 洋子 さま

動かなくなった小さな電車、電池が切れた新幹線、タイヤが外れたミニカー。

ときどき訪ねていくと、悠人はきまってこわれたおもちゃを出してくる。

「じいじ、これ直して」

そんなこともあろうかと、持参の工具と老眼鏡を取り出すじいじ。

悠人は、じいじの手元を真剣な顔でみつめる。

「ほら、動いた」。悠人の目が輝く。



『新幹線100点』

広田 泉、広田尚敬 写真
坂 正博 文
講談社 2015年

ある日、いままでと違うものが出てきた。綴じ糸が外れて、ばらばらになった新幹線の写真絵本。

電車が大好きな悠人は、子ども向けの電車の本をいくつも持っている。

何度も何度も見るうちに、ばらばらになってしまった本。どの順に重ねればいいのか、途方に暮れるじいじ。

「順番は難しいから、悠人がそろえるよ」。そう言って、悠人は瞬く間に元の順にページを重ねる。

「はい、じいじ、これ直して」

「これはちょっと手がかかるな」「持って帰ってもいいかな」

うんと悠人が大きくうなずく。

時間をかけて、1ページずつ背表紙に貼り合わせていく。全ページ貼り終えて、表紙を閉じる。

貼り合わせたところを、大きな強力クリップで挟む。接着剤が乾くまで待つ。

十分時間が経った頃、強力クリップをはずし、そっとページを開いてみる。

絵本は、生き返っている。

「ほら、直った」。じいじは、嬉しそうにほほ笑む。

新幹線たちが前より輝いて見える。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2022」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



ルリユールおじさん

本を綴じ直す(糸で縫い付け直す)製本職人をルリユールといいます。ヨーロッパで400年近く前に誕生した、製本・装幀の手仕事です。

歴史とともにその範囲や技法は変化していますが、本が仮綴じの状態で開催されていた時代から受け継がれてきた伝統的な技術は、IT化、機械化の時代に、その60工程すべてを手仕事できる製本職人が、ひとけたになったといえます。

旅する絵描きさんで絵本作家のいせひでこ氏の作品に、ルリユールを題材にした絵本『ルリユールおじさん』があります。単なる創作絵本ではありません。旅の途中に出会ったアルチザン(手職人)の強烈な矜持と情熱に惹きつけられて、パリにアパートを借りてまで毎日通って完成した、絵描きの矜持と情熱が詰まったルポルタージュ絵本なのです。



本は、人と人をつなげる

ルリユールおじさんは、少女ソフィーが大切にしていた植物図鑑が壊れてバラバラになった状態の本を修復し、綴じ直して再び蘇らせるのです。

そして、ソフィーに「ルリユール」ということばには、「もう一度つなげるという意味があるんだよ」と語りかけます。ルリユールおじさんの父親もまたルリユールで、父に語られたことばを大切に、その仕事に徹してきたのです。

「本には大事な知識や物語や人生や歴史がいっぱいつまっています。それらをわすれないように、未来にむかって伝えていくのがルリユールの仕事だ。」

ルリユールという職人は、物理的な修復だけでなく、人と人とのつながりも大切に、今を生きる人と人の絆をつなげ、先人と今を生きる人、そして次の世代へとつなぐ役目も果たしているのです。すなわち、本がもつエピソード(想い出)や歴史を大切に、本に新たないのちを吹き込むことで、その

本の中につまんでいるあらゆるものごとをひっくり返して、後世へと受け継いでいくというわけです。

壊れたら、新しい本を買い替えることが一般的になっている現代にあって、ものの価値観、特に、想い出を大切にするという概念に向き合わせてくれるのです。



未来へとつながる本

15世紀半ば、グーテンベルクの活版印刷技術の発明により、16世紀には出版はひとつの産業になり、ヨーロッパ全土に拡大しました。しかし、これがきっかけで、印刷・製本・出版という職域の境界がはっきりしないため、作業や利益などについて摩擦が生まれ、揉めるようになってしまったのです。

17世紀になるとさらに悪化したため、1686年王権統制によって印刷業者・製本職人・書籍商(出版業者)が分断され、製本職人にのみルリユールの特権が与えられたのです。その結果、書店では本格的に製本されていない仮綴状態の本が売られ、購入した人が製本工房に持ち込んで自分好みの装丁・製本を職人に依頼するようになったのがルリユールのはじまりです。

しかし、時とともに仮綴の技術が向上していったため、それに対抗すべく製本職人は新たな綴じ方や装飾を考え、ルリユールの向上へとつながっていくことになるのです。工芸製本、装丁芸術の時代を経て、その文化を残しつつ、修復という文化が生まれたのです。

冒頭の『新幹線100点』には家族の絆と、絆が引き出したご祖父様の手技、家族の成長が詰まっていて、さらに未来へとつながっていくでしょう。

文献

- 1) いせひでこ：ルリユールおじさん，東京，理論社，2007.
- 2) 野村悠里：書物と製本業〜ルリユール/綴じの文化史，東京，みすず書房，p.140-162，2017.